関係地名の由来雑考

～瀬部～

　鎌倉時代の伊勢神宮領を挙げた神鳳抄や、吉野朝時台の桧垣文書等に瀬邊と書かれています。又北朝延文二年（１３５７年）の西園寺文書及び室町時代永享元年（１４２９年）の三宝院文書、長禄二年（１４５８年）の森所蔵文書には瀬部と書かれています。更に親鸞上人絵伝をはじめ、觀応元年（１３５０年)、応安二年（１３６９年)、永和三年（１３７７年）の妙興寺文書等には木瀬又は木瀬田と書いてあります。

　これらの瀬にまつわる語源として津田正生の尾張国地名考に、「正字瀬方村なり、木曽川下流の大河原所なるべし。」とあるように、旧木曽川本流の一つで、日光川上流である浅井川と般若川の中間にあったので、そこより起こったと推察されます。

　別に親鸞上人が木瀬の道場より日比野に移る時、木瀬の信徒が木曽川の急流を瀬踏みしたから以后そこの村名を瀬踏→瀬部と称するに至ったという伝説もありますが、今日ではこれを確認する方法はないようです。（別項－瀬部七門徒参照）

　熊沢蕃山（徳川時代の著名な武人であり漢学者）の伝記はすべて瀬部の人となっています。又明治二十三年発行の片山重範著「熊沢蕃山先生年譜」に、「外曽祖諱某稱平三郎、尾張丹羽郡稻木荘左瀬部人、事徳川氏、死味方原之役」とあります。ここにいう所の左・右は木曽川の右岸左岸の意味で瀬部の中を木曽川が貫流しており、左岸を左瀬部、右岸を右瀬部と云っていたように思われます。

～瀬部の小字名～

－天保十二年（１８４１年）尾張藩調べ

新田、大塚、山王、河原、中道、下市場、四日市場、小乃場、円明寺、水堀、小出、かぶ

峠、諸谷、栗山、八万、上り戸、寺裏、寺西、上之郷、田向、本郷、中島、小寺

－明治十五年調べ

流山、山南、山北、西山、大塚、清水、久込、川原、寺浦、宮西、地蔵、神明、巡見、四日市場、墓之腰、長塚、中道、大門、本郷、上山、堂浦、諸谷、夏目塚、小出、冨士下、川原山、上り戸、漆山、中島、八幡、川垂、四万、田向、大馬場、當木、小山、上之郷、山伏、桐野、川東、杭場、兜、水堀、小馬場、砂留、水留

《出典：「瀬時の今昔」第８号　　昭和 53 年７月５日発行》

～時之島～

「一宮市史」より

尾張図地名考に、

正字鴾(とき)の島也、鴾鷺の方言に登紀といへばなり。室町将軍の頃木曾川下流伊木・北島・豆渡(まへど)山の脇村（以上美濃各務郡）、松本・小網・牛子・草江(くさる)・村久野（以上葉栗郡）、岩波(やな)・般若村此あたり来りて、水勢散乱して幾条にもなり、彌垂々々に流れたりぞ、爰に鴾鷺の群集たる島洲を呼で村名に呼なるべし。

と見え、清和天皇貞観の頃、良峰玄理此地に流され丹羽郡司となる。永仁六年九月の猿投神社文書に鴾鷺郷、文和二年七月及同年八月二十三日の三宝院文書及応安三年十月の妙興寺文書に鴾島保、応永六年の三宝院文書に鴾島、同時代欽年の同院文書尾張国衛領注文にときの嶋とある。尚応安三年の妙興寺文書沙彌道寿寄進状には、中嶋郡鴾島保とあるが、当時当地に隣接する浅井町が中島郡であったから、接続地として郡名を誤ったのは無理からぬ事で、他に中島郡内に求むべき類似地名は見られない。次で天正年間の織田信雄卿之従士分帳にもときの嶋とある。趁ち戦国時代以後古字鴾を失なひ、遂に日常使用の時字に

誤り以て現在に至ったのである。

～時之島の小字名～

－明治十五年

郷前西、土手、郷前、神上、寅新田、落合、杁先下、杁先、西川原、川向、池付、念仏塚、古薬師、西島、吹上ケ、宮西、堀口、栽松浦、月光寺、的場、八幡前、塚北、玄曾、西島前、愛宕前、番田前、塚東、下垂、中垂、妙見寺、丸先、南屋敷、中屋敷、西屋敷、本郷、上屋敷、四ツ辻、毛勝野、上垂、八龍、八龍北、下り戸、二本松南、古野、二本松西、二本松、八剣宮前、辰己出、時島宮前、宮付、宮之腰、寺東、寺前、申塚、帯田、大海道浦、託美、日吉浦、日吉東、芳原、山王、新田東、巽、中新田、川端、新川端、水元、手招、朴原、円明寺、堂山、北切野、西切野、堂山南、東託美、川角、玉振、大東、三桝野、牛洗

《出典：「瀬時の今昔」第２号　　昭和 52 年 11 月 25 日発行》